目標および成果指標の設定　記入様式

活動団体名：　徳之島地区自然保護協議会

上位関連計画にみる地域の将来
○パリ協定における日本の目標：2013年度比で2030年までに26％削減、さらに2050年までに80％削減
○第5次エネルギー基本計画における、2030年に実現を目指す再エネの電源構成比率：22～24％、
2030年に実現を目指す実質エネルギー効率（最終エネルギー消費量／実質ＧＤＰ）35％減。
○現在徳之島全体の人口：23,497人(2015年)、将来：20,489人（2030年）→17,176人（2045年）
○徳之島町の総合計画に示された将来目標と環境目標　「11,770人（2012年）→10,000人（2021年）」　「自然環境生態系の保護保全・循環型社会の推進」
○天城町の総合計画の将来目標と環境目標　「人口の6100人での維持」「自然環境に配慮し、生活基盤の整備を図る」
○伊仙町の総合計画の将来目標と環境目標　「合計特殊出生率 2.81 を維持もしくは向上」　「徳之島における自然や観光地の利用圧を調整。」

→

①目指すべき姿
※どのような地域にしたいのか、何を引き継いでいきたいのかなど、具体的にお書きください
●農家とアマミノクロウサギが興す共生の島
本地域は、世界中で徳之島・奄美大島だけに暮らすアマミノクロウサギの生息地であり、2020年夏の世界遺産委員会において、日本で５ヶ所目となる世界自然遺産登録が期待されている。
地域では、アマミノクロウサギの保護に向けた交通事故対策や環境に配慮した公共事業の結果、個体数が回復傾向である一方、アマミノクロウサギによるタンカン木への食害被害が発生するようになった。
食害を防ぐとともに、アマミノクロウサギが訪れる農園で育ったタンカンとして高付加価値化に取り組むことで、農家とアマミノクロウサギが共生する島を目指す。
また、食害を防ぐ取り組みをエコツアーとして商品化を図ることで、都市部からの人の流れ・お金の流れを生み出し、対価としてタンカンを提供することで、双方の強みを分け合う地域循環共生圏の確立を目指す。

②具体的なアクション
○アマミノクロウサギブランドの商品開発：希少種との共存を目指した農作物の開発（県、３町、事業者）
○自然体験イベントの開催：希少種を学ぶための勉強会の開催（国、３町、NPO団体）
○エコツアーの実施：希少種と農家の共生を目指すエコツアーの実施（県、３町、NPO団体）
○活動資金の獲得：ふるさと納税、寄附金による財源構築（国、県、３町、NPO団体）
○モニタリング調査：住民参加型の希少種生息範囲、食害調査（３町、NPO団体）
○ブランドの発信：開発されたブランドの発信（３町、事業者）

→

↓

③短期目標

分野	小項目	成果指標	現状値（2018年度末）	目標値（2020年度末）	実績値（2020年度末）	単位
環境	希少種が増加する	クロウサギ通算撮影率（北部）	9.83	10.00		%
	希少種が増加する	クロウサギ通算撮影率（南部）	6.41	6.60		%
	希少種が増加する	クロウサギ生息メッシュの拡大	90	95		個
	希少種が増加する	クロウサギ交通事故件数	7	20		件
	希少種を保護する	クロウサギ輪禍防止看板設置数	6	10		人
	希少種を保護する	ノネコ捕獲数	64	40		
	希少種の食外対策取組み	食外対策取り組み農家数	0	5		件
経済	稼ぐ力が充実する	ブランド農産品数	0	2		品
	稼ぐ力が充実する	ブランド関連販売品数	0	3		品
	財源が充実する	ふるさと納税・寄附件数	130	150		件
	対象が拡大する	食害発生農家数（タンカン）	2	5		件
社会	地域を活かす	自然体験イベント開催	4	5		件
	地域を活かす	ブランド関連エコツアー開催数	0	3		件
	関係者を増やす	モニタリング回数	0	1		回

→

↓

④長期目標

分野	小項目	成果指標	現状値	目標値（2020年度末）	目標年度 2030-2050年度	目標値	単位
環境	希少種が増加する	アマミノクロウサギ個体数	200	300	2030年度	1,000	匹
	農地の状況	環境に配慮した取り組み農家件	5	8	2030年度	100	件
経済	財源が充実する	ブランド農産物・関連品販売額	0	3	2,030	30	百万円
	財源が充実する	ふるさと納税・寄附件数	130	150	2,030	500	件
社会	関係人口	ファンクラブ数	0	100	2,030	3,000	人
	関係人口	目的達成に向けた関係者数	20	30	2,030	300	人

⑤短期指標が長期目標にどのように関わるのかお書きください

希少種と島民が共生する持続可能な世界自然遺産の島の形成に向けては、国の特別天然記念物アマミノクロウサギの個体数を回復させると同時に、アマミノクロウサギによる農作物への被害を低減させる必要がある。
徳之島地区自然保護協議会では、アマミノクロウサギの個体数保護に向けた取組みを行うとともに、アマミノクロウサギが訪れる農園で取れた作物のブランド化を目指しており、タンカンやサトウキビ、ジャガイモなどの農作物の高付加価値化に挑戦する。
また、徳之島町では、食害防止保護柵の設置が順次行われており、活動資金としてGCF（ガバメントクラウドファンディング）を活用するなど、全国からの寄附・ファンの獲得に取組んでいる。
こうした活動を継続していくことで、アマミノクロウサギの個体数を増加させるとともに、環境に配慮した農業に取組む農家を増やし、世界自然遺産の島にふさわしい農業の在り方を構築する。